

世の中のために

小川未明

青空文庫

毎日まいにちあめ雨が降りつづくと、いつになったら、晴れるだろうと、もどかしく思うおもことがありません。そして、もうけっして、この雨あめはやまずに、いつまでもいつまでも降るにちがいないと、一人できめて、曇くもった空を見ながら、腹立はらだたしく感じ、あの空そらへ向むかって、大砲たいほうでも打うつてみたらと空想くうそうすることがあります。「どうした天気てんきだろうな。」と、人の顔ひとかおを見さえすればうったえるのでした。

ところが、とつぜん、雲くもが切きれて、青あおい空そらがのぞき、黄金色おうごんいろの矢やのような、日ひの光ひかりがさすと、さつきまでのゆううつが、どこかあとかたもなく消きえてしまって、心こころまでが別べつじん人のごとく変かわ

るのでした。

きれいにすみわたった空の下では、あの曇った日にいただいた、ゆううつな思いを、二度味わってみたいと思っても、どうなるものでもありません。しかし、こんなことは、どうだつていいのです。ところが、僕は、ふと空想に浮かんだ、ある重大な問題^{んだい}をどうかしたはずみに忘れてしまったのです。それは忘れたですまされない、自分の一生を左右するとまで考えたものだけに、どうしても、もう一度それを思い出さなくてはならなかったのです。そして、思い出すまで、僕は、毎日ゆううつな日を送りました。

あるときは、机の前に立ったり、すわったりしました。家の内

を歩いてみました。どうかして、それを思い出そうとこころみま
 した。しかし、雲をつかむようで、考えたことが、なんであつた
 か、まったく見当が付きません。だが、最初それを考えた糸
 とぐち
 口となつたものが、あつたにちがいない。それは、なんであつ
 たか、僕は昨日から、今日へかけて、散歩した場所を目に浮かべ
 たり、読んだ書物について、吟味したりしたのでした。けれど、
 やっぱり雲をつかむようだったのです。

あるとき、友だちが、僕と話したときに、いつもノートを持
 必要があるといいました。それは、歩いているときでも、また
 床の中にあるときでも、いい考えが浮かんだり、なにか気づいた
 ことがあるときは、それを書きとめておかぬと忘れるというので

す。だが、僕は友だちに向かつて、そんなに、じき忘れてしまうような考えなら、けつきよくたいしたものでないだろう。ほんとうに大切な思いつきなら、けっして、忘れることはないはずだといつたのでした。

ところが、こんど、はじめて、かげのごとく、心の上をかすめて通る真理があり、たくみにそれをとらえれば、その真理こそ、人生にとって重大なねうちのあるものであるが、そのまま忘れてしまえば、永久に去ってしまうものなのを知りました。それを僕が、ふたたび思い出したのも、また偶然だったのです。

ある日の晩方、友だちが、遊びにきて、

「君は、チフスの予防注射をしたかい。」と、聞きました。ちようど、そのころチフスが発生したと新聞に書いてありました。

「去年、チフスと天然痘の予防注射をしたよ。」と、僕は、答えたのです。すると、友だちは、

「人間のからだへ、いろいろ病気の予防注射を打つが、それまでに、牛や、モルモットなどへ、幾たびも試験するんだつてね。そんな試験台にされた、モルモットや、牛のことを考えると、かわいそうになるのだよ。」と、真剣に考えていました。

「しかし、とうとい犠牲じゃないか。」と、僕は、かたんに答

えたものの、なにも知らない、おとなしい動物が、高度の発熱をしたり、からだの自由を失って、苦しんだりするのかわかと思つと、たとえ真理を発見するためとはいいなから、ほかには、健康で、自由に、生活する同類があるのを、僕も、やはりかわいそうに思つたのでした。

「それは、しかたのないことかもしれないが、人間はそれらの犠牲となつたものにたいして、感謝しているだろうか。」と、友だちは、さながらいきどおるごとくいいました。

こう、友だちがいうのを聞いたとき、僕は、おぼえず、

「あつ、思い出した！」と、心で叫んだのです。

いつの晩だったか、床の中で考えながら、重大なことに思

つて、目をさまして起きたときは、なんであつたか忘れてしまつて、それから、なんとなく、大きな落とし物をしたように、ゆううつだったのが、友だちの話から、思い出したのでした。

「もし自分が、あの佐倉宗吾だったら。」と、空想したことでした。あの悲惨きわまる運命にあわなければならぬと想像したのです。

いつの世にも、正しく生きようとすれば、ひとり佐倉宗吾とかがぎらないから。

やがて、友だちは帰りました。

僕は、祖父が、ひとりへやの内、たいくつそうにしていられるので、そばへ行って、

「おじいさん、どうして、世の中よなかには、まちがったことが多いおほでしょうね。」と、たずねました。

おじいさんは、いつものごとくゆつたりとした調子ちようしで、

「まちがっているって、どんなことかな。」と、おつしやいました。

「そうでしょう。正しいただことをしながら苦しめられ、悪いわることをしても、楽らくな暮くらしをしている人ひとがあるのは、どうしたわけですか。」

「なに、正しいただものは、いつかみとめられるし、正しくないものただは、しまいに罰ばつせられるのじゃ。」と、おじいさんは、いわれました。

「おじいさん、そんなら、運命うんめいというものは、どんなものですか。」と、僕ぼくが聞ききました。

「そう、運命うんめいとは、人間にんげんの力ちから以上いじょうのものでもいうのかな。」

「あまり、この世よの中なかには、運命うんめいということが、多おほすぎますね。」

「考かんえれば、そうもいえるのう。」

おじいさんは、机つくえの上うえのすずりを手てにとってながめていられた。
した。

「運命うんめいなら、何事なにごともあきらめるよりしかたがないのですか。」
と、僕ぼくが、聞きいた。

「まあ、あきらめるよりしかたはあるまい。だがお坊さんでもな
いかぎり、なかなかそうさとれぬものじや。だから、その悲しみ
を忘れるため、趣味に遊ぶということがある。歌を作るとか、絵
をかくとか、字を習うとか、また碁や、将棋をするとか。わし
などは、一ぱいやり、畑へ出て、花造りをするのも、じつは、
そのためなのじや。」と、おじいさんは、おっしゃいました。
けれど、僕には、そのお話が、なんだかなまぬるいような気が
して、ぴんと頭へこなかつたのでした。

おじいさんも、僕のように、そうさとられたとみえて、
「若いものには、わしの話はよくわかるまい。もう、おまえは、
これから、叔父さんに、なんでもわからないことを、聞くがいい

ぞ。わしは、昔むかしもので、いつでも、できるのは将棋しょうぎ相手あいてぐらいのものじゃ。「と行って、おじいさんは、やさしい目めで、僕ぼくを見ながら、おいしいになりました。

眼鏡めがねをかけて、いつも気きむずかしい顔かおつきをしている叔父おじさんは、これまで、僕ぼくにたいして、何事なにごとにも、あまり注意ちゆういをしてくれなかつたものです。よくその意味いみはわからぬが、僕ぼくの存在そんざいを無視むしするということでないだろうか。ところが、僕ぼくがたずねていつて、伝記でんきで知しつた佐倉宗吾さくらそうごの歩あるいた道みちを、もし自分じぶんが同じ境おなじきようぐう遇ようぐうに置おかれたら、やはりその道みちを歩あるいたかもしれぬ。そうすれば、同じおなじような悲惨ひさんなめにあつたであろう。正ただしく生いきることは、どうして、このように不安ふあんなのであろうかと、正しょう直じきにい

うと、はじめで、叔父おじさんは、正しょう面めんから、じつと僕ぼくの顔かおを見みて、真しん剣けんな態度たいどを示しめしたのでした。

「君きみのいうことは、よくわかるよ。しかし、君きみばかりでない。だれだって、それを考かんえると、不安ふあんになるのがほんとうだろう。」
と、叔父おじさんは、いわれました。

「どうしてですか。正ただしいことを主しゅ張ちやうして、それがいけないのは。」

「正ただしいことも、正ただしくないとい、いいはる人ひとたちがあり、そういうもののほうが、いつの世よの中なかでも勢せい力りよくを持つもつからだ。」

「ふしぎだなあ。」と、僕ぼくが、いいました。

「ふしぎはないさ。正しょう直じきな人ひとなら、なにが正ただしいか、正ただしく

ないかがわかる。たとえばわかつて、世の中のため、あくまでいいはる、勇気のある人が少ないのだ。昔から、正義のために戦つた人々は、その少ない中の人であつて、多くの人たちから、迫害されたのだ。君が空想をして、不安になるのも無理はない。」といつて、叔父さんの顔は、いつもの気むずかしい顔となりました。

「そうすると、悪い人がはびこるのは、正直でも、勇気のある人が、少ないからなんですね。」

「そのとおり、たとえば、横暴の殿さまがあつても、まわりのものは、にらまれるのをおそれて反対しない。そればかりか、気が弱いところから、いっしょになつて、善人をいじめるとい

うことになるのだ。昔とかぎらず、それが、いままでの世の中のありさまだった。」

「叔父さん、どうすればいいとお考えですか。」と、僕は、急に胸があつくなつて、叫んだのでした。

叔父さんは、しばらく、だまつて、考えておられた。むずかしいことをいっても子供にわからないと思われたので、なにか適當な答えをさがし出そうとされるふうにもとられるのです。

「いま君は、佐倉宗吾といったから、それでいい。ああいう正しい人が、ただ一人だったから、あんな最後になつたが、でも、一人の力が、どんなに大きかったかわかるだろう。もしあのような人が、十人、二十人とあつたらどうか、そして、百人、二百人と

あつたら、もはやいかなる悪い、また暴力をもつやからにた
 いしても恐るるに足らぬと考えないかね。これを見ても、一致協
 力する以外に、世の中を明るくする道はないのだよ。」と、
 叔父さんは、いわれた。

こう聞いたとき、僕の頭の中へ一すじの金色の明るい光線
 が、天からさしこんだような気がしました。

「いままで、運命といつて、あきらめたことも、協同の努
 りよく、征服することができるとすね。」

「そうだ、真理に奉仕する、野口英世のような人が出れば、これ
 まで発見の困難とされた病菌とたたかつて、人間を死
 の恐怖から、解放するであろうし、そういう科学者が幾

人も出れば、どれほど、世界を明るくし、人類を幸福にみちびくか出来ない。」

こう、叔父さんは、おつしやったのでした。なんで僕はこの言葉に深く感激せずにはいられましょう。

「よくわかりました。」と、頭を下げて、立ちかけると叔父さんが、

「君は、将来なにになるつもりか。」と、聞かれました。僕は、そくぎに、

「社会改革家になります。」と、答えた。

「えっ？」と、叔父さんは、聞き返された。

僕は自分でも、すこし感情を露骨にあらわしすぎたと気づ

いたので、

「科学者かがくしやになります。」といった。

「また、遊びあそにおいで。」と、叔父おじさんは、やさしくいわれたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「少国民の友」

1947（昭和22）年4月

※表題は底本では、「世《よ》の中《なか》のために」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世の中のために

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>